

12年に一度の「酒人間文化研究ニュースレター」第2号より ——贈る言葉に代えて——

小田桐 奈 美

近藤先生は私の中で永遠の58歳ですから、ご退職と聞いてもいまだに実感が湧きません。ちなみに、私の恩師は永遠の42歳です。私が着任した2013年、歓迎会を開いてくださったときのことを思い返すと、お互いに心の中で「この方は飲めるのか？」と探り合っていたように思います。先手を打ったのは近藤先生で、熱燗をご注文になりましたね。そこで私も「では、私もいただきます」と。つまり、すべてはあの熱燗から始まったのです。

近藤先生のサバティカル中、フランス文化に造詣の深いウタコワ先生から託された米のワイン、つまり久保田の碧寿を携え、私はベテルブルクに向かいました。当時ちょうどモスクワに滞在していたタケーヴィッチさんも合流しました。市場でキュウリウオを買って、フライにしましたね。あのキュウリウオはどうやらマトリョーシカだったようで、お腹からさらに小さな魚が出てきました。その小さな魚を食べたのかどうか、どうしても思い出せません。

そういえば、その前に「ピンタ」というお店でウォッカをひっかけましたね。「ピンタ」はロシア語でパイントのことだと思いますが、本当にウォッカをパイントグラスで飲んだのでしょうか。イギリス式パイントは568 ml、アメリカ式は473 mlですから、ありえません。調べてみると、フランス語ではパントというそうです。かつてロシアの貴族はフランス語を日常語としていましたから、フランス由来に違いありません。

そしてパリ式パントの量を調べてみると、1リットル弱……確かに、当時の写真を見ると、我々はショットグラスにしては大きすぎるグラスを手に満面の笑みを浮かべています。いや、10年以上前のことですから、我々のおててがまだ小さかっただけかもしれません。その頃、私の息子はまだ生まれてもいませんでしたから。

ネヴァ川の氷が割れて夢から覚めた後も、ユーラシアの宴は続きました。当時の「本日のおすすめ」メニューから、ほんの一部だけ振り返ってみましょう。

ドリンク

- クラフトビール「馬の健康」
- 酒蔵発ケルシュ
- ウォッカいろいろ（白樺樹液入り／サハ共和国のコイン入り）
- ジョージアワイン「ピロスマニ」陶器ボトル入り

- アルメニア産ザクロワイン
- 山崎蒸溜所 生まれたたのニューポット
- 摂津富田 蕎麦屋の日本酒

アラカルト

- ビールのお供に ピロシキ・ワークショップ名物「余ったナチンカ」
- 岩牡蠣の海賊風
- 松屋のシュクメルリ

コース

- 千里山キッチン特製コース (闇鍋風ボルシチ 中央アジア風サムサ ジョージア風ハチャブリ)
- 『亡命ロシア料理』に学んだ学生シェフおまかせコース (煮ごり ベリメニ ライ麦パン ドイツ風プレッツェル)

デザート

- アントン先生特製 いちご寒天

ある時は、スペイン・ラテンアメリカ文学に精通したバラバーノフ先生と三宮のバーを訪れましたね。「酒教」に導かれるがまま、我々は異界へ足を踏み入れてしまったのでした。そこは深い森の中で、バーの建物は鶏の足の上に立っていました。そして12年経ってようやく気づいたのです。店名は「正気の (sane) ヤガー」のアナグラム—我々は「正気のサタン」にではなく、バーバ・ヤガーにとらわれていたのでした。

通過儀礼を終え、さらに森をさまよった後にたどり着いたのは、霧に包まれた「鹿の谷」でした。バーで賜った生命の水の効果でしょうか、湖に浮かぶ白い汽船こそ見えなかったものの、私の意識はイシク・クルへ飛んでいたかもしれません。あの鹿が、ロゴージンのナイフの柄になったのでしたね。

鹿といえば、千里山のお店でいただいたのは春鹿だったか秋鹿だったか。アテは鮎の甘露煮で、鮎はキュウリウオ目に分類されるそうです。こうしてネヴァ川と千里山がつながっていたのでした。

ところで、贈る言葉でここまでお酒の話をしていいのでしょうか。読み返すのも恐ろしい……といっても三校まであるそうですから、少なくとも三回は読み返すことになります。本学部の紀要に検閲制度はないと思いますが、ロシア語で書いておけばよかったですでしょうか。ただ、ロシア語で書いたところで、いまやγ-GTPが一瞬で翻訳してしまいます。やはりイソップの言

葉を使うしかありませんが、私にその力量はありませんので、事実をそのまま書きました。ただし、酔っぱらいの記憶ですから、ほかの誰かと飲んだ時の記憶が混ざっている可能性はあります。でも、私の研究室から見える二本の桜の木が、四本に見えてはいないので、おそらく大丈夫でしょう。

……と、オチをつけたつもりの後に続けるのは、犬の5本目の足になってしまうかもしれません。それでも、関西大学で「語学は語楽」のロシア語教育を確立された、近藤先生のご功績を記さずには終われません。学内のあちこちで、「ロシア語の先生方はいつも楽しそうですね」と言っていたのが嬉しいのです。先生ご自身は「思い残すことはない」というお気持ちかもしれません。しかし、関大発のオリジナル・ロシア語教科書のロシア語版タイトルは『新たな冒険へ!』であり、続く中級編は『さらに進もう!』です。つまり、先生の「新たな冒険」はまだまだ続くのです。ここに、関大ピロシキ・ワークショップ永久参加証をお渡しし、私からのささやかな贈る言葉といたします。



